

原種生産合理化に関する調査

高田克己・猪山純一郎
(大分県農業技術センター)

TAKADA, K., and IYAMA, J.

Some Investigations for Rationalization on Original Seed Production
of Main Crops.

本県では労働不足に対処し、しかも精度を落さず原種生産をいかに行なうかが問題になっている。

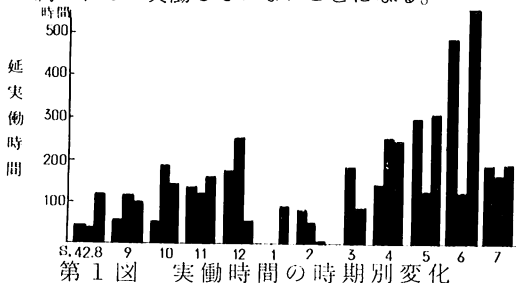
しかし原種生産合理化をはかるための資料不足が目立つ。本調査はその基礎資料を得る目的で労働実態調査を行なった。調査にあたっては、小山内所長の御教示をあおいだ、深く感謝の意をささげる。

1. 時期別労働時間および作業人数

稲麦の原種圃約450 aに要する労働は昭和42年8月～43年7月の1ヶ年間に延人数1334人、延実働時間で5460時間であった。

労働時間の時期別分布は第1図に示す通りで、春秋2回の農繁期中、春麦の収穫から田植期間の労働ピークが顕著で人夫雇用上のネックとなった。

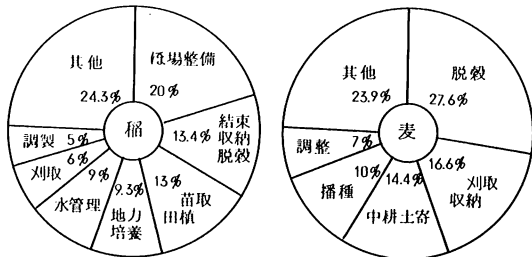
1日1人当りの実働時間は年平均3.8時間で農繁期が長く農閑期が短かった。1日の勤務時間8時間の約48%しか実働していないことになる。



2. 作業別労働時間および作業人数

昭和42年稲作は栽培面積135 a、粗生産量6480kgであった。1 ha当りに換算すると人数627人、労働時間2146時間になる。1 ha当り労働時間割合は第2図に示すように圃場整備に全作業量の20%を費しているが、これは造成初年田のための基盤整備作業でいわば臨時的なものである。移植および収穫作業にそれぞれ約13%を要している。また地力培養作業に約10%と予想外の労力を費していることが判った。

昭和42年度麦作栽培面積は319 a、生産量9370kgであった。1 ha当り164人、実働時間714時間であった。麦作では脱穀調製(約27%)刈取収穫(約17%)中耕土寄(約14%)等の作業が主なものであった。



(1ha当り総実働時間 2146時間) (1ha当り総実働時間 714時間)
第2図 稲および麦作1 ha当り作業別実働時間割合

現行体系(“今後の農業技術の展望”農林省(1967)による)の稲作労働時間は1 ha当り1691時間となっており27%原種生産の方が多く労働を要している。しかし前述のように臨時的な作業を多く含む水田圃場整備および種子生産に必要な作業を除く一般作業の比較では現行体系より稍短かった。

麦作では937時間で24%、種子生産に必要な作業を除けば30%原種生産の労働時間が短かった。

昭和43年稲作は乾田直播その他作業の大型機械化による合理化で前年に比し代かき、施肥作業では約50%実働時間の節減が出来た。

また42年度麦作では栽培様式の改善バインダー等機械の導入により前年より約30%省力出来た。

3. 問題点

1) 5月～6月収穫…田植の期間に最大の労働ピークがあり、人夫雇用上問題がある。

2) 地力培養作業に意外と多く労力を要している。

3) 1日勤務時間8時間中約52%が休息、作業準備その他に費されている。